

私の戦争とシベリア抑留

熊本県 水野 鐘 一

私は、昭和十七年一月十日、西部第七四部隊（下関重砲兵連隊）中村隊に入隊、満州派遣要員としての教育を受け、砲手として一期の検閲も終わり、中村隊長温情の二泊三日の外泊休暇を頂き、三カ月ぶりの懐かしい故郷に帰り歓迎を受ける。ちょうど桜も満開で、最後の花見と思い覚悟をする。四月下旬頃だと記憶する。

門司港より病院船にて渡満、大連上陸、大連工業学校に宿泊。ここも学校裏の公園の桜が満開で迎えてくれた。二度の花見が出来てラッキーであった。

翌日大連駅より阿城へ、新設部隊、満州第四三八七部隊（牡丹江重砲兵連隊第二中隊）内川隊に入隊する。入隊間もない頃、各中隊より一人の衛生兵選考試験を受ける。幸いにして合格、衛生兵教育のため杏樹

陸軍病院へ分遣を命ぜられる。八人の戦友と共に六カ月の教育を終了して衛生部員となり、十一月頃、原隊復帰する。それからまた間もなく部隊の移駐に伴い、牡丹江省穆稜県下城子に移駐する。バラック造りの三角兵舎で、ソ満国境に近く北の護りに誇りと緊張の日々を送り、中隊兵員の健康管理と予防衛生業務に精励し、張り切った充実の数年であった。

雨の中の幕舎生活訓練、五月になると広野一面、色とりどりの花で飾るじゅうたんは、満州でなければ見られないすばらしい風景。また、部隊兵舎を取り囲む山々の一つ一つが青春の思い出を彷彿とさせて、なつかしい限りである。

昭和十九年の初夏のころ、二中隊より四中隊に配属となる。

昭和二十年に入り、各中隊より既往症のある兵員と病弱の隊員を集めて養護中隊が編成された。私は四中隊と養護中隊の兼務となる。養護中隊も軌道に乗り成果が上がりつつある八月九日未明、ソ連軍の空爆を受ける。不意打ちである。爆音だけ聞いたときは友軍の

演習かと思つたが、異様な予感があつた。

部隊は蜂の巣をつついたようで、大変な出来事だと身震いを覚える。初めての体験で精神的にも動揺を感じる。しばらくして平常心を取り戻すことが出来た。

数回にわたる波状爆撃で負傷者続出。各中隊は出動準備に一丸となり全力を尽くす。養護中隊を直ちに各中隊に復帰する。日没を待つて私達最後の兵員は、目的地稜北林台の陣地向かい出発する。三年余りの思い出と、青春を過ごした兵舎を後に、暗闇の山道を粛々黙々と進む途中、何回となく前の者を見失い、そうで心細い思いをしたこともあつたが、数時間後、目的地に到着することができた。先発の者はすでに對戦車に備え、たこつぼを掘り終えていた。私達も各自のたこつぼ掘りである。

八月十日、我が部隊の誇りである火砲（二十四センチ榴弾砲）の威力を目に物見せんと、備砲を終えた我が中隊の将兵は、時の来るのを待っている。また、たこつぼの兵は敵戦車を何両爆破するか、いつでも来いと闘争心を燃やしている。その夜は何事もなく静か

で、遠くの方で砲声が聞こえるだけであつた。

八月十一日、観測陣地から発砲の命令下る。頼みの火砲、火を噴く。第一弾、第二弾、第三弾が敵戦車に命中だ。観測より通信があり、大歓声の中に火砲を撃ちまくる。そのうち火砲に故障発生、発射不能となり残念無念、歯がゆさで地団太踏んで悔しがつたが、どうにも出来なかつた。

しばらくして、観測陣地より負傷者数人運ばれる。私本来の仕事である衛生部員としての務めである。負傷者の救急手当てを施す。次々と溝の中に収容する。重傷者に至っては後方に送る術もなく、ただただ苦痛より逃れる手当てを施すだけであり、また、「しっかりしろ、頑張れ」と元気づけるのみであつた。私の両手には鮮血が滴っていた。

それから数分後に、負傷者の願いで谷川に水汲みに出かけたのは、午後も夕刻に近い頃だったと記憶する。水を汲んで帰りの山道を上って行く途中、陣地から続々と中隊の兵員が下って来る。いやな予感が出た。何とか水を飲ませてやりたいが何の方法も考え出

せない。自分の装具は全部陣地に置いてきたのも気にかかる。ただ流れのように皆と行動を共にすることで精いっぱいであった。陣地に敵戦車が進行して、穆稜にも集結しているとのことであった。

また数時間が過ぎ夕闇迫る頃、最後の突撃敢行である。敵歩兵部隊との白兵戦になる。勇敢な我が隊は決死の兵は突っ込んで行く。不意を突かれ驚いた敵兵は泣きわめいて退散する。数回にわたり攻防戦を交え、日もとつぷりと暮れる。敵の照明弾が時折閃光を出し昼間の明るさとなり、後はまた闇となる。

戦い済んで生存者は谷川を隔てた山上に集結した。敵は我が陣地を突破して牡丹江方面へと進行している様子、ひっきりなしに車両の騒音が続く。我ら集結隊は一路南下することになり、暗闇の山中を南を目指して行動する。昼間は樹木の繁みの中に姿を隠し、夜は闇の中を南への行動である。途中敵兵との遭遇により戦闘も数回、そのたび兵員の数も減少していくが、また三人、五人とどこの部隊かはわからぬ兵達加わり行動を共にして歩き続ける。

数日後、東京城近くまで来たとき敵の襲撃に遭い、その戦闘で私は右腰部に貫通銃創を受ける。幸い急所を外れていたもので、痛みにも耐えられた。

その後私共の集結隊と、山中にて三人、五人と加わった兵員も百数十人となっていた。すでに我ら集結隊の行動は敵の掌中にあつた。周囲は敵兵で囲まれていたのを知る由もなかった。

しばらくして白旗を掲げて双方の軍使で軍議となる。かたずをのんで全隊員見守る中、友軍の軍使より、日本は無条件降伏をしたと聞く。自分の耳を疑い足元が崩れていくような気持ちで、すぐには信じられなかった。どこからともなく嗚咽が聞こえ、今日までの張り詰めた気持ちからほとんどの者は放心状態になっていた。しばらくして我に返った。即時武装解除を受けて丸裸となる。武器になると思われる品物はすべて没収であった。日時は、八月十七日、正午頃であったと記憶する。

牡丹江に近い部隊跡に收容された。不自由な生活が一カ月余り過ぎた頃、貨車に詰め込まれた。東京ダモ

イと言つて我らを喜ばせたが、一抹の不安があつた。その不安が的中した。いつも利用していた下城子駅を通過しソ連に入り、貨車から降ろされたところはピロビジャン地区ロンドコ収容所で、駅に近いところであつた。

仕事は何回となく変わる。一番目の仕事は伐採で、三人一組の仕事はノルマ完遂で体力消耗し、一人が体調を崩したときは二人で頑張り何とかしのいだ。また、栄養失調で足元が不安定となり、小指ほどの木の枝に足を取られ転倒もしばしばであつた。特に冬期の伐採は骨身に染みみた。

また、石山での作業は、一輪車押しがなかなか出来ず、慣れるまでは苦勞の連続であつた。一輪車は初めて見る代物だつた。

次に変わった仕事は、コルホーズでの馬鈴薯植えてある。何十袋もの種芋を計算もせず植えてしまえと、気の遠くなるような話で、一人がスコップで穴を掘り、一人が種芋を入れて行く仕事で、単純な仕事ではあるが、泣かされた。一つの穴に種芋五、六個を入れ

たこともあり、春になって一斉に芽を出し、責任者に強く叱られ罰を受け牢に入れられたこともあつた。

その他にもいろいろな仕事をしたが、辛い若い体力と精神力を支えられ、苦しく辛かった二年間の抑留生活ともバイバイが出来て、昭和二十二年六月二十日、舞鶴港に無事上陸、復員することが出来た。

永い悪夢から目覚めたようであつた。

最後に、ソ満の永久凍土において尊い命を散華された戦友諸氏の冥福を心からお祈りいたします。

未踏の地での過酷な作業

熊本県 下田 繁 男

私は昭和二十年の八月一日に間島の航空隊に入りました。八月一日ですので、もう終戦までは十五日しかなかったわけです。軍籍そのものはほとんどもうわからなないので、間島の航空隊から、通化を第一線に関東軍が来るというようなうわさで通化に汽車で移動